

二〇二〇年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第三回 二月四日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

自分の好きなことをしたい。自分のものは自分で選びたい。それは誰もが望んでいることだろう。他者に関係したり、あまりにも費用がかかったり、そんなに大きな望みは無理にしても、小さな身の回りの自由ならば、普通にみんなが持っているものだと考えている人は多いと思う。

でも、^①はたしてそうだろうか？

自分が着る洋服は、自分の好みで選ぶ。他者から「これしか着てはいけない」と命じられるようなことは稀だ。会社や学校などで制服が指定されている場合はあるけれど、それ以外ではまず考えられない。

ちなみに、^{ぼく}僕が中学生だった頃には、多くの生徒が学校の制服に反対をしていた。生徒会が制服を廃止する決議をして、先生たちに訴えたこともある。実際に、こういった運動の末、制服が廃止された学校もあった。あの頃は、大学生もいわゆる「学生運動」を盛んに展開していたし、労働者もデモをしていた。口々に「自由」という理想を語ったものである。

それに比べると、今の若者たちは、当時よりもずっと自由になったからなのか、こういった自由への運動というものが **A** することはまずない。むしろ逆に、「支配」を求めているようにさえ感じることがある。

最近の中学生たちを見ると、日曜日でも制服を着ているし、それどころかみんなが「同じように」着こなしている。僕からすると、それが不思議でしかたがない。

まあ、でも、これも自由なのだから、文句をいう筋合いではないだろう。

流行というものがあって、大勢の人たちがそれを気にして、できるかぎり従おうとしている。自分の着るものくらい自由に選びたくないのだろうか？ ^②どうして流行に左右されるのだろうか？

どちらでも良いことではあるけれど、こんなささやかな部分にも、自由を考えるための好例がある。

洋服を着ているのは自分だけれど、それを見るのは自分ではない。鏡を眺めたとき以外は、自分で自分の姿は見ることができな
い。つまり、他人にどう見られたいのか、ということがファッションの主たる動機といえる。だから、自分が着たいものを素直に着
る、というわけにもいかないのが実情なのだろう。

しかしそれでも、もう少し **B** な選択があるように思える。流行を取り入れることは、つまりは考えなくて良い、「手軽な安
心」の選択なのだ。それに従っていれば、誰かに文句を言われなくて済む、という緩やかな「支配」に甘んじているといえる。

これに似たことが、インターネットで大いに普及したブログにも観察される。あれは **C** に自由になんでも書いて良いはずの
ものだけれど、もちろん実情はそうではない。人目を気にしなければならぬ。そこが従来の日記とはまったく異なっている。

本当は誰も読んでいないかもしれない（その可能性が非常に高い）のに、仮想の大勢の読者を想定して（自分の行為が注目され
ているものと妄想して）、ブログを書く人は多いだろう。そういう心理がよく表れている文章が散見される。冷静になって観察する
と、酔っ払ってハイテンションになっているときのようにも見える。

③ 本来、自分の時間は自分のためにある。何をするかは自由なはずだ。

しかし、ブログを書くことが日常になると、ついブログに書くことを生活の中に探してしまふ。人が驚くようなものを探してい
る。写真に撮って人に見せられるものを見つけようとしている。たとえば、1年かけてじっくりと考えるようなもの、10年かけなけ
れば作れないようなもの、そういった大問題や大作ではなく、今日1日で成果が現れるような手近な行為を選択するようになるのだ。
知らず知らず、ブログに書きやすい毎日を過ごすことになる。

④ これは、「支配」以外のなものでもない。人の目を気にし、日々のレポートに追われるあまり、自分の可能性を小さくする危険
がある。充分に気をつけた方が良さだろう。

そういう人は、ためにブログを1カ月くらい休むと良いかもしれない。人に見せない、というだけで、自分が選ぶものが変わっ

てくる。

誰にも見せない、誰にも話さない、としたら、貴方は何を選ぶ？ 自分のために選べるだろうか。自分が本当に欲しいもの、自分が本当に好きなものは何か、と考えることになるはずだ。ものを買うとき、選ぶとき、他者からどう思われるかを判断基準にしている、少なくとも、その基準が大半を占めていることに気づくはずだ。

ある程度はしかたがないこととはいえ、他人の目を気にしすぎると、いつか虚しくなるときが来るだろう。何のために自分は生きているのか。他人のためではない、自分のためではないのか、と……。

もちろん、これも程度の問題ではある。人間は、孤島に一人で生きているわけではない。また、たとえ今は誰にも会いたくないという孤独を愛する人であっても、将来の誰か（自分も含まれる）に向けてメッセージを残したい場合もある。

だから、他者の影響をすべて排除しろ、とっているのではない。知らず知らずに流されていないか、他人の目を気にするあまり、自分が本当に好きなものを見失っていないか、と自問することで、ちよつとした自由を獲得することができる、というだけの話だ。

自分のことを例として持ち出すのはおこがましいし、人によっては「なんだ、自慢か」と眉をひそめるかもしれないが、まあ、こんな本を書き始めたのだから、そういった恥を晒すのも仕事のうちと考えて諦めよう。

僕は、だいたいにおいて、他人の目を気にしない人間だと思う。自分が基準なので、自分が普通だと思っただけで、結局、「何故、みんなはあんなに人の目を気にするのか」と考えるはめになる。ものごとを客観的に観察しようとすると、人の目といった想像上の（思い込みの）自分の目こそ疑いたくなる。

注 *ブログ……個人の日記などを、簡便な方法で作成し、公開することができるウェブサイト。

もう少し説明すると、「人の目を気にする」人間の大半は、「自分の周囲の少数の人の目を気にしている」だけである。そして、「人の目を気にしない」というのは、自分一人だけの判断をしているのではなく、逆に、「もっと確かな目（あるときは、もっと大勢の目）」による評価を想定している、という意味だ。それは、「今の目」だけではなく、「未来の目」にも範囲が及ぶ。それが「客観」であり、「信念」になる。

(中略)

僕は大学院を修了して、すぐに大学に就職した。国立大学だったから国家公務員になった。一般の会社に勤めるよりは、かなり時間的にも、また労力としても束縛が少なく、つまり自由だったと思う。まず、上司からなにかを命令されることがほとんどない。ノルマというものも明確にはない。ときどき、会議に出席しなければならぬくらいの制約しかなかった。その当時はそんな感覚はなかったけれど、あとから考えてみたら、とても自由だったと思う。

講義をしたり、ゼミをしたりといった教育的なワークも、慣れてしまえば大した労力でもない。週に1回か2回程度のことだし、なにしろ毎年学生は入れ替わるので、内容はほとんど変わらない。蓄積ができれば、しだいに楽になる。

大学の運営については、ちょうど大学改革の時期だったから、それなりに大変ではあったものの、ただ時間をかければ良い、ということばかりで、それほど悩むようなものでもなかった。

しかし、大学人にとって最も大切なことは研究である。大学の教員は、教育者や官僚というよりは、研究者なのだ。

助手の頃は、1日に16時間は大学にいたと思う。土曜日も日曜日もいた。お盆も年末年始もない。ずっと仕事をしていた。

毎朝起きてすぐ考えることは、「今日は何をしようか」である。なにしろ、これといって与えられたノルマがない。とにかく、自分で仕事を見つけて、将来の展望を考え、計画を立て、自分で少しずつ進めるしかない。学生を指導するようになれば、彼らが考え

るテーマも探してやらなければならない。「仕事をこなす」というよりは、「仕事を作る」役目の方が大きい。何を考えるべきか、何が問題なのか、どうすれば問題が顕在化するか、どんな手がまだ試されていないか、といったことを来る日も来る日も考える。進む方向は決まっていない。やるべきことがあるわけではない。目標も、最初はどこにもない。それが研究である。自由といえは自由だ。

こういう自由な仕事というのは、たぶんほかにはそうそうないだろう。あるとしたら、芸術くらいではないか。芸術家は、こういう自由の中で生きているのかもしれない。現に、今、僕は小説家であり、まあ芸術家の一種といえなくもない。そして、たしかに、自由な点では研究とよく似ていると感じる。周囲から見ると、「自由な仕事」なんて、天国のような理想郷に思えるかもしれない。しかし、^⑦まったくその反対である。

そういった職場にいと、大きなプレッシャーがかかるのだ。その証拠に、ときどき、教授から「ちょっと、これを手伝ってくれないか」などと仕事を頼まれると、もの凄く嬉しい。やらなければならぬことがある、という状況が非常に清々しいのである。

給料をもらっているのだから、なにかしなければならぬ。なにも成果が上がらず、毎日遊んでいるばかりでは、だんだん後ろめたくなってくるだろう。それは、普通の神経の持ち主なら、たぶん長くは耐えられない。でも、とにかく考えて考えて、できないことがあれば、どうすればできるかを調べたり、試したりしながら、少しずつ前進する。しかも、その前進がまったく無駄だったとわかる可能性も大きい。それが研究というものだった。

人から与えられた仕事は、分量が決まっていて、それが終われば、その仕事が消えてなくなる。また、時間的に決められている場合も多い。5時に仕事が終わって、晴れ晴れとした気持ちになる人たちは、そこで支配からの解放を味わうのである。

ところが、研究という仕事には、こういった支配がない。だから、終わりというものが無い。毎日大学から家へ帰るときには、や^⑧

注 *ノルマ……各人に割り当てられる仕事などの量。

りかけの仕事の合間にトイレへ行くのと同じ感覚だった。仕事が終わって嬉しい、という気持ちがよく（部分的にだけ）理解できるのは、会議が終わったときくらいだった。

（中略）

こういった事例から感じるのは、「自由」というものに向き合うことの難しさである。たぶん、我々人間は自由にあまり慣れていないのだろう。

僕がいたいのは、「自由」が、思っているほど「楽なものではない」ということである。自分で考え、自分の力で進まなければならない。その覚悟かくごというか、決意のようなものが必要だ。

脅おそかすつもりはないけれど、客観的に見て、この要素を無視することができないので、マイナスの面を書いた（人によってはマイナスになる、という意味だ）。ただ、それは「山に登ることは大変だ。遭難そうなんの危険がある」というのと同様である。どんなものも、なにかを乗のり越こえなければ、獲得はできない。

自由になるには、その覚悟が必要である。

（森 博嗣『自由をつくる 自在に生きる』）

問一 ～～～線ア「おこがましい」・～～～～線イ「眉をひそめる」とはどのような意味ですか。もっとも適当なものを次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

ア「おこがましい」

イ「眉をひそめる」

- | | | | |
|---|--------|---|-----------|
| 1 | でしゃばりだ | 1 | 心配になる |
| 2 | あからさまだ | 2 | いまいましく感じる |
| 3 | 的外れだ | 3 | 信用できないと思う |
| 4 | 身勝手だ | 4 | 相手を見下す |

問二 A ～ C にあてはまる言葉の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | |
|---|-------|-------|-------|
| 1 | A 一般化 | B 利口 | C 絶対的 |
| 2 | A 表面化 | B 個性的 | C 基本的 |
| 3 | A 活性化 | B 有利 | C 本質的 |
| 4 | A 具体化 | B 多彩 | C 全面的 |

問三 ———線①「はたしてそうだろうか？」とありますが、洋服の例で筆者はどのように考えているのですか。次の文の I

II にあてはまる言葉を I は八字、II は十二字で文中からそれぞれぬき出しなさい。

自分が着る洋服を選ぶ際には、I という自由を持っているように見えるが、実際は II を判断基準にして着る洋服を決めていて、自由だとは言い切れない。

問四 ——線②「どうして流行に左右されるのだろうか？」とありますが、その理由を「流行を取り入れることで…」に続けて二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。

問五 ——線③「自分の時間は自分のためにある」とありますが、自分のための時間と対照的な時間のあり方を、この後の例で具体的にどのように述べていますか。文中から十一字でぬき出しなさい。

問六 ——線④「これは、「支配」以外のなものでもない」と言えるのはなぜですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 常に人から注目されて生活しているので、他の人に悪い影響を与えないように、行動の仕方や態度を制限されていると言えるから。
- 2 常に読者と交流しながら生活しているので、自分の思う通りに振る舞うことができず、読者の言いなりになっていると言えるから。
- 3 常に読者の存在を想定して生活しているので、自分のしたいことを自ら選んでいるわけではなく、人から選ばれていると言えるから。
- 4 常に自分の行動を記録しながら生活しているので、予定外の気ままな行動をすることができず、時間を管理されていると言えるから。

問七 ——線⑤「自分の可能性を小さくする」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 すぐに人に見せられる手近な行為ばかりを選び、自分が本当に欲しいものや時間をかけて作り上げるようなものに目を向けなくなるということ。

2 人が驚くものを探すことに時間を取られ、自分の興味のあるものについて考えることがなくなり、個性的に生きることができなくなってしまうということ。

3 常に自分を見つめる他者の目を強く意識しなければならぬので、他者の目を気にしないことで得られる本当の自由を獲得できなくなってしまうということ。

4 他人の目を気にし過ぎて虚しくなってしまう、生きる目標が見つけられなくなり、ありきたりな一日を過ごすだけで精一杯せいいつぱいになってしまうということ。

問八 —— 線⑥ 「客観的に観察」するとはどういうことですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自分一人の狭い視点にこだわることなく、相手に何を伝えられるか、自分の考えを周りはどう受け止めるかを深く考え、誰にとつても納得のいく判断をするために努力を重ねること。

2 自分の中だけの考えにとられて周りのことが見えなくなないように、さまざまな人の意見も取り入れて検討し、よりよい判断を下すために何度も考えを練り直そうとすること。

3 他者の影響は可能な限り排除し、自分が本当にしたいことを冷静に見極めるために、いったん自分の現在から離れて未来の自分を思い浮かべたり自分を見つめ直したりすること。

4 いま自分の周りにいるごく限られた人たちの評価だけではなく、未来の人も含めてさまざまな立場の人たちを思い浮かべ、多様な視点からの評価を想定して物事を判断しようとする事。

問九 —— 線⑦ 「まったくその反対である」と言えるのはなぜですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 研究には最初から立てられた目標などはなく、進む方向もやるべきことも決まっていけないので、問題を見つけ出すだけで時間がかかってしまい、自分のための自由な時間はまったくなくなってしまふから。

2 「自由な仕事」は天国のような理想郷として考えられがちだが、天国が想像の世界でしかないように「自由な仕事」も現実的にあるわけではなく、どんな仕事にもある程度の制約がかかるのは当然のことだから。

3 芸術家の一種である小説家の仕事は、自由な発想によって物語を書くものと考えられがちだが、実際には読者の期待を裏切る内容を書くことは制限されてしまうため、結果として不自由であるから。

4 「自由な仕事」は何をいつまでにやらなければならないという制約がなく、自分で計画を立てて進めていかなければならない

ので、仕事に終わりがなく絶えず精神的な圧力を感じ続けることになるから。

問十 ——線⑧「やりかけの仕事の合間にトイレへ行くのと同じ感覚」の説明としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選

び、番号で答えなさい。

- 1 研究という仕事には明確な時間制限がないため、仕事から解放されて家に帰って過ごせる時間はごくわずかしくなく、身体を休めるときがないということ。
- 2 家に帰ることはちよつとした休憩きゅうけいに過ぎず、取り組んでいる仕事ちゆうとが中途半端な状態で区切りがついてないことを常に気にかけるながら生活しているということ。
- 3 大学には依頼いらいされた仕事や会議など様々な仕事があり、時に自分の研究を途中ちゆうちゆうで放り出して他の仕事をしなければならぬことにストレスを感じるということ。
- 4 同僚どうりょうに仕事の成果をどう評価されているかが気になるので、仕事の途中で家に帰ることに後ろめたさを感じてしまい、自由に帰ることができないということ。

問十一 ———線⑨「山に登ることは大変だ。遭難そうなんの危険がある」というのと同様である」にこめられている考えとしても適

当なものゝ次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自由を求めることは楽ではなく覚悟や決意が必要であるが、大変だからといって放棄ほうきするのは間違まちがいであり、困難を承知で獲得するために取り組まなければならないものである。

2 自由になるためには自分の力で進む必要があるが、山で遭難したとしても必ず救助されるように、自由の獲得を助けてくれる人の存在を信じて進まなければならないのである。

3 自然と向き合うためにあらゆる危険を想定して準備するように、自由を獲得するためにはさまざまな困難とそれを乗り越えるための方策を考え出し、十分に備えることが必要である。

4 遭難することを考えて山に登ることをあきらめていたら身体をきたえることができないように、危険を考えて自らの行動を制限したら新しいものは手に入れられないのである。

問十二 ———線X「緩ゆるやかな「支配」に甘んじている」とありますが、身の回りにある「緩やかな「支配」」の具体例を挙げ、そこ

から「自由」になるためにはどのようなことが必要か、あなたの考えを八十字以上九十字以内で書きなさい。ただし、本文中の例を用いてはいけません。

二

「わたし」は大学に合格して北海道に行くことになった息子の森太郎に、卒業祝いを贈ろうと考えていました。ちょうどその頃、かつて自分が両親からもらったレターセットを作っていた三日月堂の店主の孫である弓子に再会し、現在は営業していないに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、問題の都合上、もとの文章から一部省略した部分があります。

家に帰ると、森太郎はいなかった。荷造りに必要なものを買うに行く、という書き置きがあった。森太郎が決めた引越しの日まで、あと二日。そうつと部屋をのぞくと、壁に沿って段ボール箱が積み重なっている。全部ひとりで詰めたのだ。

もうほんとにしっかりしてるじゃないか。

なんだかほっとして、力が抜けた。森太郎はここを出て行く。ここを巣立って、あたらしい場所に行つて、自分の人生を切り開く。わたしはいっしょに行けないけれど、森太郎のほんとの人生はすべてこれからはじまる。

すごいことだ。

よくやった、ここまでよくやったよ、自分。

そう思ったとき、急にうわつと涙が出た。

翌日、弓子さんからレターセットを受け取った。むかしと同じ箱がまだいくつか残っていたらしい。カラスがとまった三日月のマークの箱に、森の色のインキで刷られたレターセットがきれいにおさまっていた。

最後の晩ごはんのときに渡そうと思っていたのに、結局渡せないまま、森太郎は寝てしまった。わたしも仕事の疲れですぐに眠りに落ちたけど、明け方に目が覚めた。机の引き出しからレターセットを取り出す。

どうしよう。これ、いつ渡せばいいんだ？ 窓辺に座^{すわ}って、レターセットの蓋^{ふた}を開けた。「市倉森太郎」の文字に朝の光が当たる。なんだか、決まるときは一瞬^{いつしゅん}だったな。もしかしたら、お腹^{なか}のなかの子が、この名前にしろ、って呼びかけてきたのかもしれない。あのとき、夫はそう言った。でも、決まるまでは……。ああだこうだ言い合^あって、喧嘩^{けんか}になったこともあったつけ。森太郎という名前を思いついたのは夫だった気がする。理由は忘れてしまったけど……。

いや、そうだ、夫はよく言っていた。世界は「森」だ、って。人生は道、世界は森、結婚^{けっこん}は橋。旅行が好きで、旅行代理店に勤めていた夫は、よくそんなふうにいるんなものを地形にたとえた。

世界に出て、世界と向き合う子になってほしいんだよ。

あのときもそう言っていたんだ。

なんでこんな大切なこと、忘れていたんだろう。

このこと、森太郎にちゃんと伝えないと。急^{いそ}にいてもたってもいられなくなった。でも、口で言える自信はない。こんな話をしたら、泣いてしまうかもしれない。

そうだ、手紙。手紙を書こう。

たしかまだ残^{のこ}っていたはずだ。

押し入れから段ボール箱を引っぱり出す。古いものをしまいこみ、ここに越してきたとき以来、開けていなかった箱。あった。

奥^{おく}の方から三日月堂のレターセットの箱が出てきた。最後の一枚をどうしても使うことができなくて、そのままとってあったわたしの名前のはいつたレターセット。森太郎のと並べてみる。まったく同じ箱。同じマーク。ただ、古い。

震^{ふる}える手で箱を開けた。はいつていた。しまったときのまま、便箋^{びんせん}と封筒^{ふうとう}が一枚ずつ残^{のこ}っていた。濃い桜色^{けいざん}の罫線^{けいせん}と名前。

ハルは春だからね。花の色にしたんだよ。

③ これを渡してくれたときの、父と母を思い出す。父が亡くなってから、生家は処分した。母も一昨年亡くなった。

わたしも、守られていたんだな。自分の名前を見ながら思った。この名前に、父と母の思いがこめられていた。この便箋に、生まれてから巣立つまでの年月がこめられていた。

最後の一枚。

失敗できないな。机に向かい、背筋をしゃんと伸ばす。そのとき、思い出した。最後にこのレターセットを使ったのは、結婚する少し前。夫に、これからふたりでがんばろう、って書いたんだ。その手紙を、夫は小さく折りたたんで、パスケースに入れて、いつも持ち歩いていた。そのことを知ったのは、夫が亡くなったあとだったけれど。

④ 森太郎の名前にこめた夫とわたしの思い、これまでのこと、下書きを書いても消し、書いては消した。丁寧に書き写し、最後にわたしの名前と森太郎の名前を書いて、封をした。

森太郎が起きてくるまでにはまだ時間があった。キッチンに立ち、弁当を作った。高校のあいだずっと使っていた弁当箱に、森太郎が好きだったおかずを詰めた。弁当を作るのは、ほんとうにほんとうにこれが最後かもしれない、と思った。

そうして、弁当とレターセットとわたしの手紙を重ね、玄関に置いてあった森太郎のカバンのなかに入れた。

起きてきた森太郎と朝ごはんを食べ、駅まで見送った。今日は一時間遅刻で入社することになっていた。ほんとうは半休でもいいからとって、空港まで送りたいかったが、森太郎は駅まででいい、と言う。

「あのね」

改札口で別れる間際、森太郎に言った。

「カバンにお弁当いれといたから、飛行機のなかで食べてね」

「お弁当？ まったく、母さんは……。そんなの、いいのに」

森太郎はあきれたように言っつて、カバンをちらつと見た。

「でも、ありがとう。食べるよ」

そう言っつと、改札を抜け、そのまま行っつてしまった。

一週間後、手紙が届いた。あのレターセットの封筒で。森太郎からだつた。

無事に北海道の先輩の家に着いたことは、あの日のうちに電話で聞いていた。それから何度かメールが来た。一昨日、寮にはいった、という知らせも来た。いつも要件だけのメールだったが、その手紙にはけっこう長い文章が書かれていた。

レターセットへのお礼と「これはなかなかいいね。もつたいたくなくてなかなか使えそうにないけど」という感想、そして、自分の名前の由来のこと――。

森林科学を選んだのは、もしかしたらこの名前のせいかもしれない。

俺はずつと、父さんにほめられたかつたんだと思う。これまでなにをやつてもなんとなく満足できなかつたのは、父親がいなかつたから。父親からほめられることがなかつたからなんじゃないか。進路を決めようとしたとき、そう気づいた。

中学生のころ、母さんと「大人とはなにか」について話したの、覚えてるかな。母さんはそのとき言つたんだ。「自分で自分の道を決めて、そこで人の役に立つ仕事をできるのが大人。父さんはそう言つた」つて。

自分の進路を決めるのは少し不安だつた。ほんとにうまくいくのか、それで一生やつていけるのか。だけど、結局自分で決めるし

かない。進路を決めることができたのは、母さんからあの話を聞いてたからだよ。だれかにほめられるために生きるんじゃない。自分で決めた道を歩くんだ、って思えた。

今でもちよつと不安だけど、心配はあんまりしてない。がんばるよ。

あと、お弁当もありがとう。とてもおいしかった。弁当箱はこつちでも使うよ。母さんみたいに作れるか、わからないけど。

母さんの名前って、結婚する前はああたったんだね。文字になるとなんか新鮮しんせんで、びつくりした。母さんにも高校時代とか、大学時代があつたんだなあ、って。

いままでありがとう。

また入学式で会うけど、口では言えないから、手紙で言っとく。じゃあ、また。

ぼろぼろ涙が出ていた。

便箋をたたみ、封筒に入れた。空になった三日月堂のレターセットの箱におさめ、涙をぬぐった。もう明後日だ。北海道に行くのは。三日の休みを取って、入学式のために北海道に行く。

森太郎の「これから」を見に行くんだ。だから、泣いているわけにはいかない。^⑤レターセットの箱を引き出しにしまい、りょうほお両頬をばんと叩いた。

森太郎からの反応を弓子さんに伝え、あらためてお礼を言った。

「よかったです」

弓子さんがほっとした顔になる。

「ほんとに、弓子さんが徹夜でがんばってくれたおかげ。ありがとう」

「いえ、そんな……。わたしも勉強になりました。名前って、不思議だな、って。自分のものだけど、自分では決められない。ほかから与えられるものですよね。なんだか、親と子をつなぐ蝶番ちゅうつがいみたいだなあ、って。」

⑥「蝶番……」

ぽかんとした。

「あ、わたし、変なこと、言いましたか？」

弓子さんがあわてて言う。

「ううん。そんなことない。その通りだな、って、ちょっとびっくりしただけ」

森太郎がどんなに遠くまで行っても、わたしとも、亡くなった夫とも、名前がつながっている。

「実は、わたし……活版印刷*をもう一度やってみようかと思うんです」

弓子さんが迷いながら言った。

「え？ほんとに？」

「はい。あの夜、印刷しているとき、祖父のことをいろいろ思い出しました。『印刷とはあとを残す行為こうい。活字が実体で、印刷された文字が影かげ。ふつうならそうだけど、印刷ではちがう。実体の方が影なんだ』^⑦って」

「実体の方が影……？ 不思議な言葉ね」

「『わたしは影の主。三日月堂のマークのシルエットのクラスなんだよ』^⑧って、笑って言っていました。祖父は亡くなったけど、機械は残ってる。三日月堂の機械を動かすことは、祖父のあとを世に残すことにもなると思うんです。だから……」

弓子さんはそう言ううつつむいた。

「いいじゃない。そういえば、大西さんと柚原さんも、レターセットを作りたいって言ってたわよ。わたしも頼たのみたいわ」

最後の一枚を使ってしまったことを思い出して言った。

旧姓きゆうせいじゃない、いまの名前で新しいレターセットを作ろう。

「それに、もし仕事する気なら、わたしが宣伝部長になるわ。けっこう、顔が広いのよ」

「ははは……。お願いします」

弓子さんが笑った。春の日差しがおだやかに坪庭つぼにわを照らしていた。

(ほしおさなえ 『活版印刷三日月堂 星たちの葉』)

注

*活版印刷……木や金属に文字を浮うき彫ぼりにした字型を組み並べた版(活版)を用いた印刷方法。
*活字……活版印刷に用いる字型。

問一 —— 線①「ほんとの人生」とありますが、これまでの森太郎の人生とどのような点がちがうのですか。森太郎からの手紙を参考にして四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問二 —— 線②「市倉森太郎」の文字に朝の光があたる」の表現の説明としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「わたし」だけの落ち着いた朝の空間の中で、「森太郎」とのこれまでの暮らしを振り返る雰囲気をかもし出し、これからは「わたし」から離れて一人の生活を始める息子の成長した力強さを象徴している。

2 新しい始まりを感じさせる「朝の光」が、レターセットを「森太郎」に渡すことに対するためらいをかき消し、「わたし」が本当に息子に伝えたいメッセージを見つめ直す力を与えたことを示している。

3 「わたし」が自分の本当の気持ちと向き合うきっかけを作り、頭から離れない「森太郎」と別れることに対するさみしさを見せないように、明るく息子を見送ろうという「わたし」の決意を示している。

4 レターセットに書かれていた「森太郎」という名前に焦点をあて、名前の由来をあざやかに思い出すきっかけとなることを表しているだけでなく、「森太郎」の未来が明るく広がっていくことを暗示している。

問三 —— 線③「これ」が指すものを十五字以上二十字以内で具体的に書きなさい。

問四 —— 線④「森太郎の名前にこめた夫とわたしの思い」とはどのような思いですか。 —— 線④より前の文中から一文でぬき出し、最初の五字を書きなさい。

問五 —— 線⑤ 「レターセットの箱を引き出しにしまい、^{りょうほち}両頬をばんばんと叩いた」という「わたし」の様子の説明としてもっとも
適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 森太郎からの手紙を読んで、亡くなった夫の言葉や今までの子育てのことを思い出ししみじみと人生を振り返ることができ
たが、息子と離れて自分も新しい人生を歩まねばならないことに気づき、自分自身を奮立たせようとしている。

2 親元から離れて暮らす不安を隠して書いた手紙を読んで森太郎をいじらしく思うが、母親として自分までもが弱々しい姿を見
せてしまつてはさらに息子を不安にさせてしまうだろうと考え、無理をして明るく振舞おうとしている。

3 森太郎からの手紙に成長を感じただけでなく、育ててくれたことへの感謝の言葉まで書かれていたことに感動して涙があふれ
たが、新天地でスタートを切る息子の姿をしっかりと見届けるために気持ちを切り替えようとしている。

4 一人で森太郎を育てることに苦労はあつたが、節目節目で夫の言葉を上手く息子に伝えることができていたことが分かり、安
心する一方でいよいよ一人になってしまうことを実感し、この先の人生に思いを巡らせて呆然としていく。

問六 —— 線⑥ 「蝶番」とありますが、名前が蝶番であるとはどういうことですか。本文全体をふまえて四十字以上五十字以内で説
明しなさい。「蝶番」とは、「扉などに用いて開け閉めできるようにする金具」のことです。

問七

——線⑦「実体の方が影」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 印刷されて残った文字こそが存在を示すものであり、活字は文字を残すために使われ、使い終わったら組み替えられる道具に過ぎないということ。

2 紙に印刷された文字は、原物である活字にインクをつけて、その形を紙の上に写し取っただけの量産可能なコピーに過ぎないということ。

3 活字が手で触ることのできる具体的な物体であるのに対し、印刷された文字は活字を用いて写し取られた、抽象的なイメージに過ぎないということ。

4 印刷された文章は文字と文字が緊密に結びついて生き生きとした全体を形作っているのに対し、活字は生命感のない物体に過ぎないということ。

問八 —— 線⑧ 「祖父のあとを世に残すことにもなると思うんです」とありますが、このときの弓子の気持ちとしても適当なものをおの次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 祖父の死後、印刷の仕事から遠ざかっていたが、久しぶりに印刷機を動かしたことで祖父の残した言葉を思い出し、印刷に対する考えを後世の人々に伝えていきたいと考えている。

2 祖父の残した機械を使つて自ら森太郎のレターセットを作つてみたことで、自分がまだまだ未熟であることを実感し、今後は祖父を手本として印刷の技術を磨いていきたいと考えている。

3 祖父が亡くなり三日月堂も営業していなかったが、祖父が残した機械を使つて印刷の仕事を続けることで、同じようにして実際に働いていた祖父の生きた証あかしを示したいと考えている。

4 久しぶりに祖父の残した機械を動かしたことで、印刷に対する強い執着しゆうちやくに気づき、自ら三日月堂を再興することで祖父の無念を晴らし、その遺志を受け継ぎたいと考えている。

問九 本文の内容にあてはまるものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 新しい生活が始まる森太郎はなるべく「わたし」と顔を合わせずに別れを迎えようとし、「わたし」はそれにさみしさを感じていたが、「わたし」の手紙をきっかけに二人はきちんと向き合うことができた。

2 森太郎が北海道に進路を決めたのは、中学生の時に抱いた亡くなってしまった父に認めてもらいたいという気持ちを、大人になつた今、母から離れた場所で形にしようという意志によるものだった。

3 「わたし」はかつて両親からもらったレターセットを使い、折に触れて手紙を書いてきたが、結婚する少し前に夫に手紙を書いたのを最後に、今回森太郎に手紙を書くまでそのレターセットを使うことはなかった。

4 弓子は今回森太郎のレターセットを作ったことをきっかけに、もう一度三日月堂の営業を再開しようと考えようになつたが、祖父が残した活版印刷用の機械はあまりにも古いので不安を感じている。

問十 この文章では登場人物たちが手紙のやりとりをしています。そのやりとりから読み取れる手紙の良さを四十字以上五十字以内で

書きなさい。



次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 優勝のロウホウに学校中がわいた。
- 2 ツウカイな逆転ホームラン。
- 3 電気ケイトウが故障する。
- 4 学校のキシクシヤに入る。
- 5 スポーツ界にクンリンする。
- 6 雨垂れ石をうがつ。

問題は以上です

